

令和5年大神神社初詣・レポ

中井 弘

1月10日(火)参加者21名。晴。残念ながら三輪山登拝はコロナ禍で中止となりました。

今年の参拝は、正面の拝殿ではなく祈禱殿となり、神官の厳粛なお祓いを受け「奈良・人と自然の会」行事と会員の安全を祈願しました。

大神神社にはご祭神・大物主神(大国主神・大己貴神と同神)を祀る本殿はなく、三輪山そのものを神体山として崇拝する、いわゆる神奈備山信仰であり、山頂の奥津磐座を大物主神とする磐座信仰とされます。

記紀では出雲の「大国主神」は、国造りの大己貴神や万物の主・大物主神など6つの別名を持ち、役割を分担していました。大物主神は出雲の神ですが、大和の三輪山の山頂に祭られて大神神社の祭神となりました。



次に「活日神社」(祭神:高橋活日命)に参拝。

「日本書紀」崇神天皇8年の条に、石上神宮布留川のほとり高橋邑に住む「活日」を大神神社の杜氏としたとみえます。祭りの日に活日は神酒を造って崇神天皇に奉り、「この神酒は 我が神酒ならず 倭成す大物主の醸みし神酒 幾人幾久」と詠みました。

山辺の道を20分歩いて、元伊勢といわれる「檜原神社」に着きました。大神神社の末社で



すが本社同様の「三つ鳥居」があります。

神武天皇以来、天照大神自身の意向に従って自らの霊である神鏡(八咫鏡)は天皇の御殿内で寝所を共にする「同殿共床」で祀られてきましたが、崇神天皇6年に疫病が流行り国民の大半が罹災しました。天皇は天照大神との同殿共床が祟ったと考え、その神威を畏れて皇女「豊鍬入姫」に託して、檜原神社の辺りとされる笠縫邑に神籬(ひもろぎ)を立てて神聖な場所として神鏡を収めました。

次の垂仁天皇25年に、その神鏡を皇女「倭姫」に託して納める土地を求めて近江(籠神社)、美濃など各地を経て伊勢に至り、天照大神が所望した五十鈴川の辺に遷されました。これが八咫鏡をご神体とする伊勢神宮「内宮」の創始とされます。天照大神が各地を旅した際に一時的に祀られたとされた場所、檜原神社や籠神社などが「元伊勢」と呼ばれています。檜原神社から見える二上山の秋分・春分に沈む夕日はこのほか美しいといわれています。

檜原神社から来た道に戻り、「大直禰子神社」(おおたかねこじんじゃ)をお参りしました。

明治の神仏分離令までは大神神社の神宮寺「大御輪寺」と呼ばれていました。当寺にあった有名な十一面観音立像は、廃仏毀釈を免れて平等寺を経て現在は聖林寺に国宝として安置されています。

大田田根子(=大直禰子)は、大物主神と須恵器の生産地・陶邑の首長の娘「活玉依姫」との間にもうけられました。崇神5年「日本書紀」には国内で疫病が流行り、人口が半減するほどの猛威を振るったとあります。天皇の夢枕に大物主神が現れ、わが子大田田根子を探して祭主とし、我を祀らせれば万事うまくいくだらうとお告げがあり、大物主神を祀らせるとさしもの疫病も収まりました。このような新しい疫病は、外国からの渡来人が持ち込んだ可能性が高く、最終的に収まったのは崇神7年であり2~3年間流行したことになります。